

小木地区の人口と世帯

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2021-09-06 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.24517/00064070

This work is licensed under a Creative Commons Attribution-NonCommercial-ShareAlike 3.0 International License.



2. 小木地区の人口と世帯：日本全体と能登町との比較

岡田 優太

1. はじめに
2. 小木地区の人口と世帯
3. 能登町からみた小木地区
4. おわりに

1. はじめに

本章では、人口と世帯に関する数値データを通して、小木地区の現状と変化を見ていく。基本となるのは、2019（平成 31）年 3 月 31 日の小木地区住民基本台帳データであり、それを総務省統計局の『日本の統計 2019』に記載されている日本全体の人口・世帯データ、さらに能登町全体のデータと比較することで、小木地区の特徴が浮かび上がってくるだろう。

2. 小木地区の人口と世帯

表 1 は住民基本台帳による 2019 年 3 月 29 日現在での小木地区の人口および世帯の状況で、人口 1,599 人、世帯数 711 世帯、1 世帯あたりの平均成員数は 2.25 人である。2018（平成 30）年の国民生活基礎調査によると、日本全体では 1 世帯当たりの平均成員数は 2.44 人であり¹、小木地区の世帯規模は日本全体のそれより小さいことが分かる。

総務省統計局『日本の統計 2019』によると、平成 27（2015）年の国勢調査のデータに基づいた平成 29（2017）年人口推計で、総人口 1 億 2670 万 6 千人である²。男女別にみると、男性は 6165 万 5 千人、女性は 6505 万 1 千人で、人口性比（女性 100 人に対する男性の数）は 94.8 である。2019（平成 31）年 3 月 29 日時点の小木地区の人口性比は、102.7 であり、わずかではあるが総人口と比較して男性人口の割合が多いことがわかる。ただし人口の自然減を考えると平均寿命は男性よりも女性の方が長いため³、とりわけ小木地区のような高齢化が進む地域では、その傾向がみられる。表 2 は男女別年齢層別の人口構成を示したものであるが、確かに 65 歳以上では女性の割合が高くなっている。しかし、働き手世代をみると男性の方が多い。小木地区は漁業を中心とした第一次産業が基幹産業であるため、男性の働き手を必要とするだけでなく、婿養子として別の地域から移住してくる男性もおおり、割合として高まる傾向がみられる。さらに、小木地区の特徴としてイカ釣り漁業に従事する技能実習生の存在が大きい。表 2 では、日

¹ 厚生労働省政策統括官付参事官付世帯統計室『平成 30 年 国民生活基礎調査の概況』(2018)。

² 総務省統計局『日本の統計 2019』(2019)。

³ 厚生労働省の「平成 30 年簡易生命表」によると、男性の平均寿命は 81.25 年、女性の平均寿命は 87.32 年である。

表 1 小木地区の人口と世帯数

		男 (人)	女 (人)	人口計 (人)	世帯数 (戸)	平均世帯 員数(人)
1	西町第一	58	57	115	51	2.25
2	西町第二	40	49	89	35	2.54
3	東町第一	56	50	106	41	2.59
4	東町第三	86	53	139	75	1.85
5	新町	52	55	107	47	2.28
6	下浜第一	42	41	83	26	3.19
7	下浜第二	40	35	75	32	2.34
8	下浜第三	69	75	144	68	2.12
9	下浜第四	57	51	108	53	2.04
10	高浜第一	40	43	83	35	2.37
11	高浜第二	27	32	59	29	2.03
12	三矢第一	24	29	53	20	2.65
13	三矢第二	39	35	74	31	2.39
14	庄崎第一	90	70	160	75	2.13
15	庄崎第二	68	67	135	49	2.76
16	庄崎第三	22	47	69	44	1.57
合計		810	789	1,599	711	2.25

出所：平成 31 年 3 月 29 日付住民基本台帳より作成

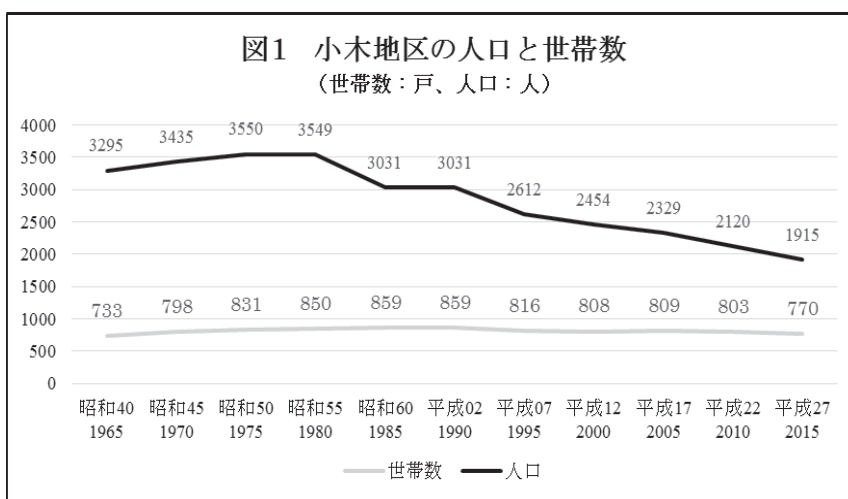


表 2 男女別年齢層別の人口構成

年齢層 (歳)	日本人		外国人		人口計 (人)
	男性人口 (人)	女性人口 (人)	男性人口 (人)	女性人口 (人)	
105~109	0	0	0	0	0
100~104	1	0	0	0	1
95~99	0	3	0	0	3
90~94	17	25	0	0	42
85~89	34	47	0	0	81
80~84	60	76	0	0	136
75~79	68	101	1	1	171
70~74	88	101	0	0	189
65~69	70	81	0	1	152
60~64	63	59	0	0	122
55~59	52	34	0	0	86
50~54	39	41	0	1	81
45~49	52	43	0	0	95
40~44	38	36	0	2	76
35~39	27	13	0	8	48
30~34	28	18	0	4	50
25~29	20	21	2	4	47
20~24	34	18	50	0	102
15~19	27	18	0	0	45
10~14	15	13	0	0	28
5~9	17	12	0	0	29
0~4	7	8	0	0	15
合計	757	768	53	21	1599

出所：2019年3月29日付住民基本台帳

本人と外国人に分けて男女別年齢層別の人口構成を示しているが、外国人の男性人口が20歳代前半に集中していることが分かる。小木地区では、インドネシアからの技能実習生を受け入れており、技能実習生は1カ月の研修期間を経て中型イカ釣り船や定置網漁船などに乗り込み、3年間にわたって技能習得を行うという¹。若者の人口流出にともない漁業従事者が減少するなかで、技能実習生の存在は小木地区においてとても大きなものとなっている。

ここで、小木地区の人口と世帯数の推移をみておきたい。図1は国勢調査データから小木地区の人口と世帯数の変化を示したものである²。小木地区の人口は、1980年以降、年々減少傾向にある。世帯数も同様に、1990年の859世帯をピークに年々減少している。日本全体の人口の増減をみると、1973年をピークに人口増減数は減少するが、増加数が減少数を下回ることはなかった³。しかし、2005年に初めて減少数が上回り、2011

¹ 北國新聞「漁業実習生 小木で歓迎 県漁協 インドネシアから25人」(2019年4月17日)。

² 各年の『市町地区別人口及び世帯の概数』より作成

³ 総務省統計局『人口推計(2018年(平成30年)10月1日現在)』(2019)。

年以降は人口減少が続いている。先述の通り、小木地区の基幹産業である漁業を中心とした第一次産業は、自然の影響をじかに受けるだけでなく、社会的な制度変更により大きく方向転換を迫られるような産業でもある。『内浦町史 第三巻 通史・集落』(1984: 426-463)によると、小木地区は戦後、イカ釣り漁業の拡大や新漁場の開拓、さらにサケマス漁業の発達により、漁業が盛んに行われていた。しかし、昭和40年代後半にイカ釣り着業船の急増により資源が減少しただけでなく、燃料の高騰や北朝鮮、ロシアといった国々の二百海里経済水域の実施により、漁場が狭まることによって漁業従事者の生活は厳しくなってしまった⁷。産業の衰退が人口減少に及ぼした影響は大きい。たとえば、穴水町の穴水駅から珠州市の蛸島駅を結ぶ能登線が走り、小木地区にも九十九湾小木駅が存在していたが、利用者の減少から2005年3月に廃止となった。産業の衰退が人口減少を引き起こし、人口が減少することによってさらなる産業の衰退を招いてしまうといった悪循環が続いていることがわかる。

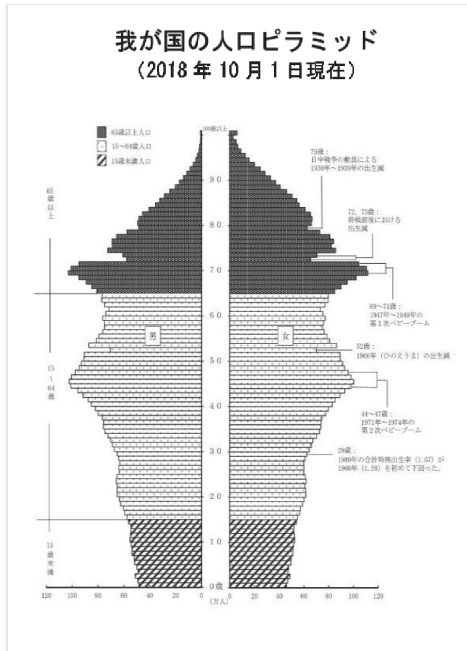
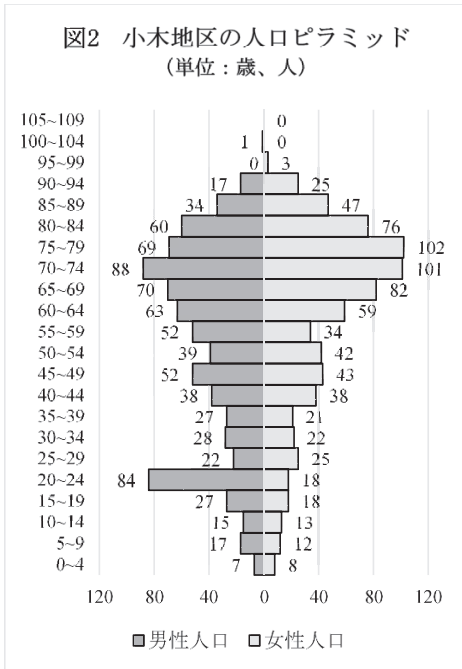
日本全体の世帯数は、1970(昭和45)年の30,297千世帯(一般世帯)から2015(平成27)年の53,332千世帯へと増加を続けており、なかでも単独世帯や夫婦のみ世帯の増加が著しく核家族化の影響がみてとれる。それを示すように日本全体での一世帯当たりの平均成員数は1970年の3.41人から2015年の2.33人に減少している。ここ数年は減少傾向にあるものの、日本全体と比べて、小木地区の世帯数は緩やかな推移を見せている。一方、一世帯当たりの平均成員数(平均世帯人員数)は小木地区と日本全体ともに減少を示してきた。1970年の小木地区の平均世帯人員数4.30に対して全国のそれは3.41人であったが、2015年には小木地区2.49人に対して全国2.33人となった(全国については「一般家庭」の数字)。両者ともに減少してきたが、小木地区では日本全体よりも急激な世帯規模の減少がみられた。

日本全体の動向との比較から小木地区の特徴を考察すると、小木地区はこれまで漁業を中心とした第一次産業が盛んであり、労働集約型産業のため多くの働き手を必要としてきた。そのため1970年の平均世帯人員数にみられるように大規模世帯となる傾向にあった。しかし、日本における高度成長期の産業構造の転換は、小木地区のような第一次産業を中心とする地域に打撃を与え、都市部への人口流出に作用したと考えられる。特に、小木地区は先述のように社会的影響による漁業の衰退も相まったことにより、若者の人口流出が深刻化した。これらの要因が人口減少の反面、世帯規模は縮小しつつも、世帯数の減少はゆるやかという結果につながったとみられる。

さらに、日本全体と小木地区との比較分析をするために、視覚的なデータを参照した読み取りを行っていく。図2は小木地区(2019年3月29日付住民基本台帳による)と日本全体(『人口推計(2018年10月1日現在)』(総務省統計局)による)の人口ピラミッドである⁸。少子高齢化が深刻な日本であるが、小木地区ではその傾向がより強くみ

⁷ 内浦町『内浦町史 第三巻 通史・集落』(1984)。

⁸ 総務省統計局『人口推計(2018年(平成30年)10月1日現在)』(2019)。



られており、60歳代から80歳代にかけて幅が広がる頭でっちな人口ピラミッドとなっている。日本全体の人口ピラミッドでは、ベビーブーム期に当たる年齢層の人口が第一次、第二次ともに同じくらいであるが、小木地区の人口ピラミッドでは第二次ベビーブームに当たる40歳代中頃の人口が第一次ベビーブームの人口と比べて少ない。確かに前後に比べて人口は多くなっているが、日本全体の傾向ほどではない。また70歳代前半をピークに年齢層が下がるにつれて人口が減少傾向にある。特に20歳代後半から30歳代にかけては、それ以前に比べて低い値となっている。

小木地区には中学校までしか教育機関が存在せず、高校進学時に他の地域へ移動する者も少なくない。また大学進学率の上昇は、若者の人口流出を加速させる傾向にあり、小木地区においても避けられない問題となっている。筆者は第9章において、小木地区の地域振興についても論じているが、Uターンで役場職員になった人への聞き取りの際に、「役場職が無ければ地元に戻らなかった」とUターンの決め手が安定職であることに言及していた。教育機関の不足により地元を離れざるを得ない状況のなかで、地元に戻るという選択の懸念として、小木地区の雇用の少なさ、産業の衰退という課題があるのではないかと考えられる。

表3は小木地区の男女別人口構成（3層）と日本全体の人口構成（3層）を示したものである⁹。小木地区の男女合わせた満65歳以上の高齢者は775人で高齢化率は48.5%と、日本全体の高齢化率（2018年28.1%）を大きく上回る。

⁹ 総務省統計局『人口推計（2018年（平成30年）10月1日現在）』（2019）。

表3 小木地区の人口構成

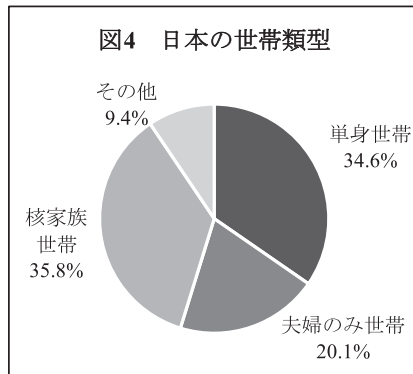
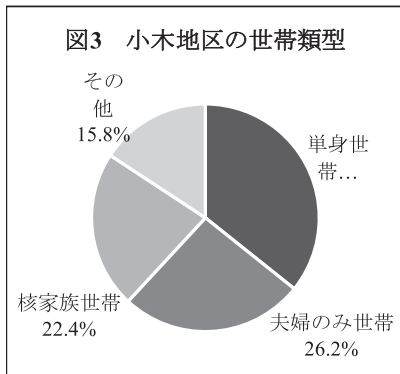
小木地区	男性 (人、%)		女性 (人、%)		全体 (人、%)		日本全体 (%)
	人	%	人	%	人	%	
0~14 歳	39	4.8	33	4.2	72	4.5	12.2
15~64 歳	432	53.3	320	40.6	752	47.0	59.7
65 歳以上	339	41.9	436	55.3	775	48.5	28.1
計	810	100.0	789	100.0	1599	100.0	100.0

小木地区は 2019 年 3 月 29 日付住民基本台帳、日本全体は「人口推計 2018 年 10 月 1 日現在」(総務省統計局)による

表4 小木地区と全国の世帯類型

世帯類型	小木地区 (2019 年)		全国 (2015 年)	
	世帯数 (戸)	割合 (%)	世帯数 (千戸)	割合 (%)
単身世帯	254	35.7	18,418	34.6
夫婦のみ世帯	186	26.2	10,718	20.1
核家族世帯	159	22.4	19,036	35.8
その他	112	15.8	5,024	9.4
計	711	100.0	53,196	100.0

出所：2019 年 3 月 29 日付の小木地区住民基本台帳；2015 年国勢調査



従属人口指数 (15 歳未満の年少者と 65 歳以上の年長者の人口が、生産年齢人口年齢に対して占める比率) は、日本全体の 68.85% (2018 年) に比して、小木地区では 112.63% である¹⁰。将来を担う年少人口の割合 (4.5%) も、日本全体 (12.2%) を大きく下回ることから、先述のように小木地区における教育機関の不足による人口流出を考慮すると、今後も従属人口指数は高くなると予想される。

¹⁰ 総務省統計局『人口推計 (2018 年 (平成 30 年) 10 月 1 日現在)』(2019)。

表4と図3、4は小木地区と日本全体との世帯類型を比較したものである。小木地区の世帯類型としては、「単身世帯」が最も多く254戸(35.7%)、次いで「夫婦のみ世帯」が186戸(26.2%)、「核家族世帯」が159戸(22.4%)、「その他」112戸(15.8%)となっている。これを日本全国の世帯類型と比較すると、全国では核家族世帯の比率が最大で35.8%を占めるのに対して、小木地区は低い割合(22.4%)になっている。また小木地区の核家族世帯のうち、65歳以上の高齢者を含む割合は61.6%であるため、年齢層の高い核家族世帯が多いことがわかる¹¹⁾。

3. 能登町からみた小木地区

これまで、小木地区の人口と世帯について、国勢調査を中心とした日本全体のデータとの比較により、その特徴を明らかにしてきた。最後に、能登町における人口と世帯の様子について触れ、能登町との比較からわかる小木地区の特徴について考察していきたい。

表5 能登町の旧町村地域の人口

能登町	男性(人、%)		女性(人、%)		全体(人、%)		人口性比
旧能都町地域	3,792	45.9	4,463	54.1	8,255	100.0	85.0
旧柳田村地域	1,610	46.3	1,869	53.7	3,479	100.0	86.1
旧内浦町地域	2,799	47.9	3,043	52.1	5,842	100.0	92.0

出所：『平成27年国勢調査速報集計 市町地区別人口及び世帯数』より

2019(平成31)年版の能登町の町勢要覧によると、2015(平成27)年の国勢調査のデータで、総人口は17,568人である。男女別に見ると、男性は8,198人、女性は9,370人で、人口性比(女性100人に対する男性の数)は87.5である¹²⁾。また能登町の世帯の状況は、世帯数6,904世帯で、1世帯あたりの平均成員数は2.54人である。能登町は、2町1村(能都町・内浦町・柳田村)が合併して発足したため、人口についてそれぞれの地域ごとにみていくと、表5のようになる¹³⁾。男性と女性の比率はどの地域もほぼ同じであるが、小木地区が含まれる旧内浦町地域は他と比べて人口性比が大きくなっている。小木地区の人口性比は102.7であり、能登町の中でも男性の割合が高い地区であることが分かる。

図5は、能登町の人口ピラミッド(2015(平成27)年国勢調査による)であり、人口

¹¹⁾ 2019年3月29日付の小木地区住民基本台帳より、単身世帯で65歳以上の高齢者である146世帯を、全単身世帯数254で割った数値。

¹²⁾ 石川県民文化スポーツ部県民交流課統計情報室『平成31年(2019)版 石川縣市町要覧』(2019)。

¹³⁾ 石川県民文化局県民交流課統計情報室人口労働グループ『平成27年国勢調査速報集計 市町地区別人口及び世帯数』(2016)。

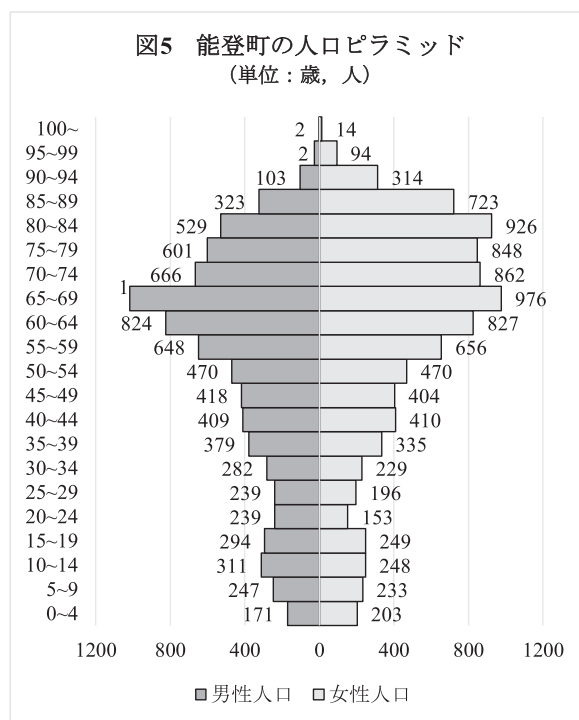


表6 能登町の人口構成

能登町	男性 (人、%)		女性 (人、%)		全体 (人、%)		小木地区
0~14 歳	729	8.9	684	7.3	1,413	8.0	4.5
15~64 歳	4,202	51.3	3,929	41.9	8,131	46.3	47.0
65 歳以上	3,267	39.9	4,757	50.8	8,024	45.7	48.5
計	8,198	100.0	9,370	100.0	17,568	100.0	100.0

出所：能登町は2015年国勢調査、小木地区は表3を参照のこと

構成は表6のようになる¹⁴。65歳以上の女性の割合が大きく、頭でっかちでありながら、いびつな人口ピラミッドである。特筆すべきは、20歳代の少なさである。能登町には石川県立能登高等学校があり、他の地域に進学する者もいるが一定数、学生を集めている。しかし、大学進学時には他の市町村あるいは県外に移動しなければならない。若者の人口流出の問題は小木地区のみならず、能登町全域において深刻な問題となっている。能登町と小木地区との人口構成を比較すると、能登町の年少者の割合が8.0%に対し、小木地区は4.5%と低い。

表7と図6は能登町の世帯類型を示したものであるが¹⁵、単身世帯の割合は日本全体

¹⁴ 総務省統計局『平成27年国勢調査結果』(2016)。

¹⁵ 総務省統計局『平成27年国勢調査結果』(2016)。

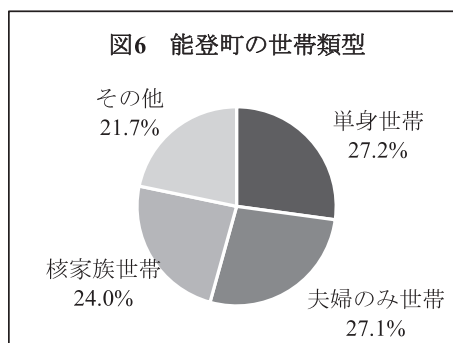
や小木地区と比べて小さいが、反対にその他の割合が大きくなっている。世帯類型の「その他」には、夫婦と両親／ひとり親、三世同居などが含まれるため、その傾向が強くなるのではないかと考えられる。小木地区は日本全体よりも単身世帯の割合が大きかったが、インドネシアからの技能実習生や 65 歳以上の高齢者の単身世帯が多いことが影響している。特に小木地区の単身世帯のなかで 65 歳以上の高齢者は 57.5% で約 6 割を占めている。小木地区は九十九湾に面しているため、高低差が激しく坂も多い地域であり、単身世帯の高齢者に対するサポートが必要となるだろう。最近では小木地区の避難訓練において地元の中学生が高齢者と一緒に避難したり、地域活動を一緒に行ったりすることで、お互いに顔を覚え合うようなサポートがなされている¹⁶。また、買い物に利用するプリペイドカードには見守り機能があり、数日間買い物していない状態が続くと、通知が息子や娘世帯に届くようになっている¹⁷。

表 7 能登町の世帯類型

能登町 (2015 年)		
世帯類型	世帯数 (戸)	割合 (%)
単身世帯	1,867	27.2
夫婦のみ世帯	1,866	27.1
核家族世帯	1,647	24.0
その他	1,494	21.7
計	6,874	100.0

出所：2015 年国勢調査

図 6 能登町の世帯類型



4. おわりに

これまで日本全体や能登町との比較から、小木地区の人口と世帯の特徴をみてきた。日本の総人口は、2011 年から 8 年連続で減少しており、人口減少が進んでいる。また、人口ピラミッドの形状をみても、少子高齢社会であることが分かる。日本全体では、人口減少と少子化が大きなトピックとして取り上げられているが、小木地区ではより深刻な問題となっていた。

小木地区は、能登町のなかでも漁村として発展し、イカ釣り漁業の拡大とともに小木港が整備され、繁栄を遂げてきた地域である。産業の発展とともに人口も拡大し、世帯数も増加傾向であった。しかし、日本における産業構造の転換や漁業従事者に打撃となった社会的変化は小木地区における漁業の衰退につながり、若者を中心とした人口の流出がさらなる産業の衰退を引き起こしてしまった。水産庁の『平成 30 年度 水産白書』(2019: 177)によると、「漁業集落の多くは、リアス海岸、半島、離島に立地しており、

¹⁶ 能登町立小木中学校の S 先生への聞き取りによる。

¹⁷ 第 9 章の 4.2.2 「内浦商店連盟協同組合」注 11 を参照のこと。

漁業生産に有利な条件である反面、自然災害に対して弱いなど、漁業以外の面では不利な条件下」にあるとしている¹⁸。小木地区は人口 1,599 人であり、能登町小木漁港の背後に位置していることから、漁港背後集落¹⁹に位置づけられる。水産庁（2019：177）によると、漁港背後集落のうち、背後に崖や山が迫る狭隘な土地にあるものが 59.1%、急傾斜地にあるものが 27.6%で、67.9%が過疎地域となっている²⁰。小木地区にも当てはまることであり、安心して暮らせる安全な漁村づくりを目指していくために、漁村における生活基盤の整備やインフラの長寿命化、そして漁村の活性化といったことが必要となってくるだろう。とりわけ小木地区は幼年者の割合が能登町全体と比較しても小さく、教育機関の不足による人口流出が避けられない地域であるため、小木地区の今後において課題となってくるだろう。

¹⁸ 水産庁『平成 30 年度 水産白書』（2019）。

¹⁹ 漁港背後集落とは「漁港の背後に位置する人口 5 千人以下かつ漁家 2 戸以上の集落」のことをいう。

²⁰ 水産庁『平成 30 年度 水産白書』（2019）。